

最終講義

開港百五十年史：小江戸・大江戸・そして横浜

原 朗

東京国際大学経済学部

(2009年3月16日)

一

本日は、私たちのためにこのような機会を設けてくださりまして、たいへん有難うございます。主催してくださる大学院院生有志の皆さん、経済学部、大学院経済学研究科に厚くお礼を申し上げます。また、お集まりくださいました同僚の諸先生、本学他学部の先生方、また遠方からお集り下さいました皆様に深くお礼を申し上げます。先日1月20日に学部の最終講義をいたしました時にも韓国から聴講にお見えになった教授がおられまして大変恐縮いたしました。本日もわざわざ私の最後の講義を聴くために遠路はるばる韓国からお越しくださいました方々には、特にお礼を申し上げる次第です。

岩田昌征君と私が同じ年に同じ大学の同じ研究会に入ってから、ちょうど50年の年月が経ちました。そして今、同じ大学の同じ教室で一緒に最終講義をすることになったのです。まことに不思議な縁と言わざるを得ません。偶然といえば偶然ですが、二人がともに学問研究に、社会科学の研究に志していなければ、この「偶然」は起こり得なかったでしょう。

最終講義ということですから、50年かかって解ったこと、いわば50年間の結論を申し上げるべきかも知れませんが、あるいは50年間の勉強の過程を要約して申し述べるべきかも知れませんが、しかし、後者についていえば実は昨年『年報日本現代史』という雑誌に「現代史との出会い」と題してすでに白状してしまっております。大変恥ずかしいのですが、決心して御手許にプリントをお配りいたしました。お持ち帰りになられましてから、ご覧くだされば、私の拙い歩みはお判りいただけるかと思えます。

では50年間の結論を述べよ、と云われますとこれが大変困るのでありまして、実は結論はまだ十分な形では得られていない、結論を求めて苦闘中でありまして、まだ解らないのです。従いまして、前者の道も後者の道もとることができない、どうしようか、と思ひまして、結局私がたどり着いた最後の講義について素直にその概要を申し上げることにいたしました。私がこの半年間週2回、経済学部で行いました最後の講義の序論と結論、その二つを結びいくつかの議論を要約して述べまして、責を果たしたいと存じます。もともと学部の講義でございますから、大学院の諸君や先生方にとりましては大変不足であろうと思ひますが、この1月20日に行いました学部での講義が、私が本学で行ってきた十年間の

日本経済史の最後の講義でございますので、本日はまげてその要約をお聴きとりいただければ有難いと思うのであります。

そこでまず今学期の講義の要点を申し上げ、つぎに、私が東京国際大学に着任してから今日までの10年間、どんな講義をしてきたかを振り返ってみたいと思います。そして最後にもし時間があれば、お手許のプリントと若干重なりますが、自分が勉強してきた過程を、かいつまんで素直に振り返り、私が大学に入ってから50年間、どんな勉強をしてきたかをあらためて反省し、大学生生活五十年を終えるにあたって、学生や院生の皆さんにお伝えしたいいくつかのメッセージを述べたいと思います。

本学期の講義の主題として、私は『開港百五十年史』を選びました。今年2009年は幕末開港からちょうど百五十年目、去年2008年はアメリカなど五カ国と開港を定めた安政五条約から百五十年目でしたので、日本経済史のうち近現代の百五十年を中心にお話をしたわけです。安政五条約の翌1859年7月に横浜・函館・長崎の三港を開き、貿易を開始いたしました。近代日本経済史の起点をなすのは、この開港による貿易の開始であると私は考えております。

もちろん、1853年の黒船来航と翌年の日米和親条約締結に基づく「開国」が政治史ではたいへん重要であります。が、「開国」が経済的にいかなる帰結をもたらすかをみれば、1859年の「開港」がやはり重要な意義を持つわけですね。そこで大掴みに50年ごとに時期を三分し、開港、開港五十年、開港百年、開港百五十年と四つの時点をとらえまして、その時々々の日本と世界の経済の姿を見渡してみようとしたわけですね。

五十年ごとに機械的に切るといのはちょっと乱暴ですから、地方史というか比較都市史というか、もう一つの視角を導入して、その乱暴さを少し和らげようとしてみました。東京国際大学は、小江戸と呼ばれる川越にございまして、大江戸とよばれた江戸・東京とは、新河岸川の水運によって結ばれております。黒船来航の当時、川越藩は浦賀一帯の警備を担当しておりました。

最初の開港場の一つ、もっとも重要な開港場となった横浜は、陸路のみならず、経済的にはむしろ水運によって江戸と結ばれておりました。このように連なっている川越・江戸・横浜の三都市、小江戸・大江戸・そして横浜という、大・中・小三つの規模の都市の経済が、ほぼ五十年ごとにどんな姿を我々に見せてくれるか、そういう観点を入れて見たわけですね。また、厳格に単年度の歴史的事実で説明しようとするのはその時代の雰囲気を知る意味ではちょっと無理でしょうから、1860年前後の三年間、1910年前後の三年間、1960年前後の三年間、という風にやや幅を持たせてそれらの時代を描写できれば、と思っております。

1859年の開港以前に、横浜はごく小さな村・漁村でしたから別として、川越と江戸との関係はどのように展開してきたかを見ておきましょう。

二

まず世界の中で東アジアに、そして日本に注目し、そのなかで川越市、さらに霞が関に絞り込んで見てみましょう。川越や霞が関、というのは世界から見れば顕微鏡を用いてようやくわかる小さな地域ですが、まあ最近ではグーグル・アースですぐ見ることもできますけれど、その川越市や霞が関について、今度は望遠鏡を用いて昔々にさかのぼってみましょう。

川越市で一番古い考古学的遺物は下小坂登戸で発見された旧石器時代末期の一個のナイフと二個のポイント、尖頭器ですが、時期はあまり特定できません。縄文時代早期の末になると霞が関遺跡に炉跡がありますが、住居址は伴っていません。縄文前期前半の奥東京湾の海岸は川越小仙波貝塚まで来ており、霞が関遺跡にも住居址がみられます。炉を伴った竪穴住居で、四角い形の方形プランです。縄文中期には霞が関野的場に遺跡があり、その後数百年の空白時代をおいて弥生時代後期と古墳時代前期・後期には的場霞が関遺跡の集落址があります。東京国際大学第二キャンパスのすぐ西には、近辺の前方後円墳として最も大きい牛塚古墳があり、ここに写真1に示した金銅製の指輪や、きれいな切子玉などが出土しております。6世紀ごろ、古墳時代後期後半に近隣の共同体を政治的に統合する小専制君主の出現を示すものと評価されています。

川越という名が実際に史料によく出てくるようになりますのは、12世紀半ば、1156年の保元の乱に河越氏や仙波氏が源義朝に従軍して、崇徳上皇の白河殿を襲ったころからです。武蔵武士団の河越重頼らは源頼朝に服従し、義経の宇治川の合戦、一の谷・壇の浦の合戦に参加しました。重頼の娘は頼朝の媒酌で義経の正妻になり、重頼の妻は頼家の乳母になっております。15世紀になって、1457年に太田道真と道灌の親子が河越城を築城し、道灌は江戸城をも築きました。

16世紀になりますと河越は後北条氏の支配下にはいりましたが、秀吉の全国統一の際1590年に無血開城し、同年徳川家康が江戸に入り、河越藩を設置して酒井重忠が河越城主となり、一万石を領しました。重忠の弟の忠利は1609年に城主となり、江戸幕府の老中職を兼務しております。無量寿寺北院の天海僧正が家康の知恵袋になったことも有名であります。

1634年には川越城主酒井忠勝が江戸幕府の大老となりました。忠勝は江戸城登城の刻限を正確に守って「酒井の太鼓」と呼ばれ、川越の「時の鐘」（写真2）の最初の創設者になりました。翌35年、堀田正盛が城主となり、これまた幕府老中職を兼ねました。川越が重視されたのは軍事的には江戸城北辺の守りとして、経済的には物資を江戸に補給する拠点として重視されたわけです。1638年には川越大火があり、翌1639年には島原の乱を鎮圧した松平伊豆守信綱が川越に転封されました。

将軍家光の小姓として出発した彼は、すでに1633年に幕府老中を事実上兼務して「智恵伊豆」とよばれましたが、1638年川越大火の後の町割り、現在の都市計画を実行しました。町割りの図で現在最も古いのは地図3、元禄7年、1694年以前と推定されている川越御城

下絵図面です。御城のほか、武家屋敷は白い色で示され、下級武士の屋敷地は薄茶、十か町と寺院が肌色、郷分がねずみ色、寺領が朱、道が黄色に塗り分けられています。信綱はさらに城を大拡張し、新河岸川舟運を本格的に整備したほか、江戸の玉川上水開削工事の総奉行をつとめ、分水して野火止用水を引きました。町の再建や喜多院と東照宮の復興のために新河岸川を利用して再建資材が運送されております。1657年江戸の明暦の大火のあと、信綱は大江戸復興の町割り、都市計画を実行しましたが、このときに川越大火の際の町割りの経験が役に立ったといわれ、その意味では大江戸の町は小江戸の町割りをモデルとして再建されたということもできます。

江戸と川越との陸路による人馬の往来では、いわゆる川越街道、当時の呼び方では「脇往還」が使われました。1660年代、寛文年間に整備されたもので、江戸日本橋と川越御城大手までの距離は伊能忠敬の測量では日本橋から川越札の辻まで十里三十二町十五間半、中山道と板橋宿で別れ、上板橋・下練馬・白子・膝折・大和田・大井の各宿をへて川越仙波・札の辻に着いたのです。ほぼ一日半の旅程でした。終点の札の辻は当時の川越の中心で、現在の中心である蔵の町から見ればその一番北、写真4に示した小松屋さんという屋号のしゃれた民芸品店で国の重要文化財になっている大沢家住宅、この店は寛政4年、1792年に呉服商の近江屋半右衛門が建築したのですが、そのちょっと北が札の辻です。この家が簡素ですが一番古い蔵造りで、明治26年、1893年の大火でも燃えなかったというので、これを見習って蔵造りの町ができるきっかけとなったのです。

ただ、大量の物資の輸送は陸路では無理ですので、新河岸川舟運が重要な役割を果たしました。新河岸川水運の略図を示しますと地図5の通りです。この舟運は豊富な物資を送り込んで大江戸の経済を支えるとともに、午後3時に上新河岸を出て翌朝8時に千住大橋に着き、隅田川を下って昼に浅草花川戸に着くという船路三十六里の客船、いわゆる川越夜船も運行されました。図6にありますように川越から江戸へは入間・比企の農村地帯から集まる米・麦をはじめ、俵物・醤油・素麺・木材・炭・杉皮などが運ばれ、江戸から川越までは綿織物や麻織物などの太物・絹織物・小間物・瀬戸物・鉄類・塩・油・酒・塩魚・肥料などが運ばれ、利根川・江戸川水運に匹敵する役割をはたしておりました。どんな船かというと、これは大分のちの明治42年、1909年のものですが、写真7をご覧ください。河越仙波河岸の水運回漕店の引札、広告です。さらに大正2年、1913年の新河岸の船着場の写真8があります。これを関東平野全体の水運の中に位置付けて見ますと、地図9のように、川越五河岸から花川戸への新河岸水運は、関東の河岸場町の中でも江戸に最も近い重要なものだったことがわかります。

将軍綱吉に重用された側用人柳沢吉保は、1694年から1704年まで川越城主となって11万2300石を領し、1698年に老中格となりました。次の城主秋元喬知も幕府老中を兼ね、これ以上はもう申し上げませんが、歴代川越城主は江戸幕府の老中職を6名、大老職を2名が次々に勤めました。川越城主はほとんど上層譜代の重臣で、それぞれの時代の幕政担

当者を輩出したわけです。1767年から城主が松平氏となったところで、一足飛びに話を1840年代に進めましょう。

ご承知のように1840年はアヘン戦争が起こった年で、イギリスが清国に攻めかかり、ここに東アジアは激動する近代を迎えたのであります。川越藩はすでに1806年に会津・桑名の両藩とともに幕府から沿岸防備の命を受けておりましたが、1842年に相州、今の神奈川県沿岸警備を命ぜられ、相州三浦郡に一万五千石の替地を与えられて浦之郷に陣屋を設け、常備120人で警護にあたりました。観音崎砲台は絵図10にありますように川越藩の担当でした。

1845年にアメリカの捕鯨船マーカット号が房州沖に来航したときや、翌46年にアメリカのビッドル提督が率いるコロンブス号とヴィンセンス号の2隻が浦賀に来航したとき、海防の任にあたったのは川越藩筆頭家老小河原政甫であります。絵図11がその時のコロンブス号を取り巻く警備船の図です。時は弘化三年閏五月二十七日の朝五つ刻、黒船を認めた川越藩士石高150石の内池武者右衛門は、城ヶ島沖で先頭のヴィンセンス号に乗り込み船印を上げ、身振り手振りと言葉で異国の乗組員と一日中珍問答をかわすという大変面白い話がありますが、今日はちょっと申し上げる時間がございません。もともと、内池は史料12に示した「先登録」という克明な記録も残しておりますので、普通伝えられているような面白おかしい話だけではありません。

川越藩主は藩士に砲術を奨励し、翌47年には三浦半島の東半分を川越藩、西半分を彦根藩が警固することとなります。1849年にイギリスの軍艦マリナー号が来航したときには、川越藩は観音崎の陣屋から出動し、浦賀港へ引き入れています。

沿岸の警備は藩財政を圧迫し、儉約令を出すとともに家臣から半知を借り上げ、御用達商人の筆頭の米穀商横田次郎吉のちの五郎兵衛(写真13)、この人は関八州の長者番付で、図の14に示しましたとおり東の横綱と言われた人ですが、藩はこの人や川越十組問屋、新河岸の船問屋などに巨額の調達金を課しました。横田が動けば江戸の米相場が動くといわれ、のちに第八十五国立銀行、現在は蔵の街の真ん中にある洋風建築の埼玉りそな銀行ですが、写真15ではお菓子屋さんのくらづくり本舗の後ろになっていますから、写真16のほうが判りやすいでしょうか、この銀行は横田五郎兵衛の所有地につくられ、のちに横田はその頭取ともなり、屋敷跡は写真17のように現在は醤油屋の松本家住宅、店蔵・塩蔵・文庫蔵・味噌蔵・仕込み蔵などを備えた広大な松本醤油店になり、横田の別邸は現在料亭の山屋になっております。横田は勘定奉行格として藩の御用達を命ぜられ、黒船来航の折の防衛費の一部も負担しました。

1853年、川越藩は相州沿岸警備を免除され江戸湾一之台場警備を申し渡されました。そして1859年、開港の年に川越藩警備のこの台場にロシア人が上陸し、幕府の指示を仰ぐなどという事件が起こっております。川越と江戸の関係を軸に、ようやく本題の開港の年、1859年に辿りつきました。

三

ここからは主役は川越から横浜に移ります。「開港」の前提として、当然「開国」の経緯をお話しする必要もございましょうが、ここでは1853年にアメリカのペリー提督がいわゆる黒船艦隊を率いて来航し、翌年日米和親条約が結ばれ、1858年にハリスとの交渉の末、日米修好通商条約が結ばれ、オランダ・ロシア・イギリス・フランスとも同様な条約、合わせて安政五条約が結ばれました。写真18が翌年に刊行された和文の版本ですが、それに基づいて1859年7月1日（旧暦6月2日）に横浜・長崎・函館の三港が開港した、と云う簡単な事実のみを申し上げるにとどめます。条約交渉当時の横浜は神奈川宿からもはなれた全くの寒村であったことは写真19の右中央に小さく横浜、応接所と描かれている通りです。

この日、アメリカ商社の帆船が最初に入港し、午後3時頃に入港手続きをしております。午後4時にオランダ船、翌日イギリスのデント商会の持ち船が入港しました。写真20や21は、開港間もない1865年頃の横浜の様子を伝えようとしたものです。今年2009年はオランダが平戸に商館を設けた1609年からちょうど400年目で日蘭友好年とされていますから、1859年までこの間250年の出島貿易の時期が経過していたわけです。

翌1860年1月、日米修好通商条約の批准のため咸臨丸で勝海舟らが太平洋を渡り、3月に桜田門外で大老井伊直弼が水戸浪士らに暗殺され、5月には咸臨丸が帰国、1862年8月、薩摩藩の行列を横切ろうとした外国人が殺害されるという生麦事件が起きました。この事件は、下手人の島津家の支配する薩摩藩士を徳川家の将軍が処罰できるかという難題をもたらし、徳川将軍の国内的支配の内実が、対外的代表性を必ずしも保証しえないという事態に展開し、このダイナミクスが幕末維新の激動を推し進める巨大な力となりました。事態は薩摩藩と英国との薩英戦争に展開していきますが、その詳しい次第は吉村昭氏の『生麦事件』の克明な描写に譲りましょう。

1860年には、横浜から数千頭の馬が輸出されました。これは1856年から続いていた第2次アヘン戦争、アロー号戦争の軍需物資を運ぶ軍馬として使われたのでありまして、馬の飼料の小麦・大豆も4000トン以上が輸出され、江戸の蕎麦屋が蕎麦に混ぜる小麦の不足を幕府に訴えるというようなことも起きております。

1861年12月には、のちに川越城主となる神奈川奉行松平康英が、幕府の遣外使節の副使となり、1863年に予定していた江戸・大阪の二都などの開港の五年延期と、樺太の国境線確定を課題として西洋六カ国巡回に出発し、同使節団には福沢諭吉や福地源一郎なども入っております。

1863年には江戸横浜間の航路に蒸気船稲川丸が就航し、67年に横浜に住む日本人は1万人を超えました。1869年には米国太平洋郵船が横浜・神戸・長崎・上海航路を開設し、月2回の定期便が運航されるようになりました。1872年6月には品川横浜間で日本最初の鉄道が開通し、10月に新橋まで延長され、翌73年の鉄道利用者は年間140万人に上っています。

以上を要約いたしますと、小江戸川越は新河岸川水運によって大江戸につながり、江戸と横浜も近距離海運によって結ばれていたこと、川越は江戸を守るための軍事的拠点であるとともに経済的な拠点でもあったこと、多くの川越城主が江戸幕府の老中となって手腕をふるったこと、幕末には川越藩が江戸湾入り口三浦半島の警護を命ぜられて異国船との接触の最前線にあったこと、などが要点でした。小江戸川越を大江戸にむすび、さらに横浜に結べば、横浜からは西へ上海に、東はサンフランシスコへ、世界は広がっていくことになるわけです。

四

幕末開港以降は、私が三和良一さんや、池元有一さん、山崎澄江さんたちと共同編集した『近現代日本経済史要覧』をテキストとして、経済史に関する史料や統計に即して講義を進めました。自分の書いた『日本経済史』という教科書があるのにそれを使わず、あえて『要覧』という史料集をテキストに選んだ理由は、歴史学の基礎となる一次史料に近い史料になるべく直接に触れることが、歴史学の一部としての経済史を考える時に重要だと思うようになったからです。

開港後の貿易、明治維新期の廃藩置県、地租改正、秩禄処分、台湾出兵、殖産興業、と話を進める中で、とくに特命全権大使岩倉使節団について、若き歴史家久米邦武の著した『米欧回覧実記』を詳しくとりあげ、講義の回数で3回かかりましたが、その最初から最後まで、すべての図版をもれなく見ていきました。プリントで総目次を配布し、横浜から太平洋を横断してサンフランシスコへ、ホテルについてまず燦然としたホテルそのものに大変びっくりしたこと、アメリカ横断の旅、首都ワシントン、全権委任状という外交上の慣習を知らず条約改正ができなかったこと、フィラデルフィア、ニューヨーク、ボストン、大西洋をリヴァプールへ渡り、ロンドンをはじめイギリスではさまざまな工場で産業革命の成果を見せつけられ、同時に資本主義の暗黒面をも知ったこと、フランスの首都パリの整然とした美しさ、ベルギーなど小国も大国に負けずに特色を生かして発展しており、小国日本の参考になると感じたこと、プロシアのビスマルクに列強対峙の現実を教えられたこと、ロシア、イタリア、ウィーンの万国博覧会、スイス、マルセイユからスエズ運河を通り、帰国途中でみたアジア諸国の港々での見聞などを辿り、使節団と一緒に学生さんや私もタイムスリップをして世界一周の旅をしたかのように感じることができました。使節団が海外を巡っている間に留守政府が行った地租改正などの改革や、征韓論分裂から西南戦争にいたる士族反乱も重要な事柄の一つでした。

自由民権、紙幣整理、大日本帝国憲法、企業勃興、産業革命、と講義を進め、日英通商航海条約により条約改正の一部である法権回復がなされたのを見極めるや否や、直ちに清国に対して開戦し、その帰結である下関条約により日本は植民地台湾をえて最後の帝国主義国に浮上した一方、清国は同じ条約の資本輸出権条項により帝国主義諸列強により勢力圏を設定され、日本に対する賠償金の負担とともに半植民地という地位におちいったこと、

朝鮮問題では日韓併合を待たず日露戦争開戦直後の日韓議定書と第一次日韓協約、戦争終結直後の第二次日韓協約で実質的に朝鮮半島支配の実権を握ったこと、などを述べました。戦争目的から考えれば、日清戦争は第一次朝鮮戦争であり、日露戦争は第二次朝鮮戦争と呼ぶべきものでありましょう。

さて、横浜では貿易金融の便宜を図るために1880年に横浜正金銀行、Yokohama Specie Bank、略して YSB が設立され、戦前の日本全体の外国為替・貿易金融専門銀行として大きな役割をはたしました。これは日本銀行設立の2年前にあたります。第二次世界大戦後は東京銀行という名称に代わり、現在は三菱東京 UFJ 銀行の一部になっておりますけれど、戦前には外国各地の主要都市における日本人社会の頂点は、外務省の大使夫妻、横浜正金銀行 YSB の支店長夫妻、三井物産会社 MBK や日本郵船会社 NYK の支店長夫妻などが構成していたのです。1880年には横浜正金銀行と並んで横浜商法会議所が、81年には横浜連合生糸荷預所が設立されています。

日本銀行による紙幣整理の結果、兌換銀行券条例により1885年に銀貨兌換が実行されることになりました。次に御覧に入れる紙幣は日本銀行兌換銀券で、表面中央の丸のなかに「此券引換に銀貨一円相渡し申すべきもの也」と、裏面には英文で **Nippon Ginko Promises to Pay the Bearer on Demand One Yen in Silver** と印刷してあります。1889年に横浜は人口11万6193人で市制をしき、1901年に第1次市域拡張で人口30万人になりました。

開港五十年にあたる1909年の1年前、1908年に黒船ではなく、こんどは白船が来航しました。艦長の名はスペリー、ペリーではなくスペリーで、プレ開港50年を祝う、という名目で、アメリカ艦隊が示威活動をしたわけですが、横浜では民衆が逆にこれを大歓迎してしまいまして、アメリカの示威は空振りに終わりました。

開港50年を記念して、1909年、横浜は今でも使われているハマというロゴ、カタカナで上下にハマと書くロゴと、鷗外森林太郎作詞の市歌を制定しています。このころ、横浜は全国の生糸・羽二重・茶などの輸出貨物を引き付け、全国に繰綿・羊毛・油粕・機械類などの輸入商品を送り出す集散地として大きな発展を遂げました。1911年に第2次市域拡張で44万人になっています。

川越では1908年に県立染織学校が開校し、霞が関村で金銭貸付業霞が関興産が設立され、1909年10月には川越町で大日本蚕糸品評会および織物同業組合連合品評会、関東商業会議所連合会、関東茶業者大会が開かれました。茶業大会の時には、当時の川越は「商業の盛んなること県下第一にして農工これに亜ぐ」とされています。翌1910年3月に川越織物市場、9月には川越繭市場が開設されています。繊維産業を中心とした当時の経済発展の状態をよく示しているといえるでしょう。写真22が1910年4月ごろの織物市場のありさまで、写真23は寛延年間から作られてきた川越名産の桐箆笥、このほかさまざまな産業が図24のように発展していきます。茶・醤油・味噌・菓子などの食品工業、川越平・川越斜子などの繊維工業、細工物・家具などの木工品、農具・刃物などの金属工業、多様な展開がみられます。

1906年に川越・大宮間に川越電気鉄道が開通、1914年に池袋・川越間の東上線が開通し、川越と東京は鉄道で結び付くことになりました。写真 25 は遊びですけれど、1917年頃の霞が関村的場にカネ原の屋号をもつ呉服・小間物・売薬店の鍋屋商店という店があり、美人の後ろに当時の電話機がありますから、カネ原さんに行けば電話が借りられる、ということがわかります。なお、1922年に川越町は仙波村を合併して県下最初の市制をしき、人口2万7千人の川越市となりました。

東京では1909年初めに東京市民大会が電車賃値上げ反対を決議し、織物業者も織物消費税全廃大会を開きました。その年10月、伊藤博文はハルピン駅頭で朝鮮の民族主義者安重根に射殺されました。ご承知のように伊藤は初代韓国統監として韓国併合に重要な役割を果たし、伊藤を射殺した安重根は、抗日軍大将として今でも尊敬されています。1910年8月の韓国併合に際して石川啄木は「地図の上朝鮮国にくろぐろと墨を塗りつつ秋風を聴く」と詠みました。韓国では現在でも日本の山口県が大嫌いで、その理由は伊藤のほかにはやはり長州出身の寺内正毅も併合後初代の朝鮮総督になって武断政治をおこなったからです。伊藤は一時千円札の顔になりましたが、在日朝鮮人はこの銀行券を使うのを嫌がりました。

1910年には大逆事件の検挙が始まり、翌年幸徳秋水らの死刑執行に対して、徳富蘆花はただちに一高で『謀叛論』という激的な演説を行って抗議しました。石川啄木も平出修弁護士からひそかに入手した幸徳秋水の陳述書を筆写し、慌ただしい12名の処刑直後に詳細な訴訟記録を読んでおります。このころ、1909年12月に山手線で電車運転が始まり、特別高等警察、いわゆる特高が設置されたのは1911年5月のことでした。

五

さて、今学期の講義を始める時、まず最初にリーマン・ショックがあったことも考慮して、景気循環と恐慌に特に重点を置いて講義を進めてきました。今日は一々詳しくご説明いたしません、日露戦争後明治末期の不況や第一次大戦のブーム、とりわけ1919年の熱狂的好景気・バブルとその反動としての1920年戦後恐慌以降、恐慌から恐慌へとさまよった両大戦間期には日本銀行の特別融通が続けられています。1923年の関東大震災は東京と横浜に大きな打撃を与えました。

経済史的に見て重要なのは、商取引の秩序を何とか維持するために行われた震災手形の再割引が、なかなか処理できずに遅延を重ね、それが爆発した1927年金融恐慌では、第一次大戦の好況期に全盛を極めた鈴木商店、一時は「三井三菱を圧倒せん乎、然らざるも彼らと並んで天下を三分せん乎」とまで豪語したかの鈴木商店と台湾銀行が共倒れになり、台湾銀行救済の緊急勅令案が枢密院で否決されて内閣は総辞職、宮内省本金庫の十五銀行まで銀行取り付けが波及して、ついに全国銀行の三日間休業にいたり、日銀は必死で裏白の二百円札（写真 26）まで発行して全国の銀行に急送するという事態になりました。緊急に発行したので人物の肖像などの紋様すらありません。コレクターの現在の相場では1枚650万円もする、という代物です。裏白の50円札も用意されましたが、これは発行せずに

済みました。川越の第八十五銀行では写真 27 にありますように大量の現金の山を窓口に積んで全国銀行休業明けの日に備えました。

ただ、これらの恐慌と、昭和恐慌・世界大恐慌はその性格が非常に異なります。1929 年夏、浜口内閣が井上財政による金解禁政策を公表したことに端を発し、世界大恐慌よりも早く恐慌状態に陥りました。井上準之助蔵相は、不況を覚悟したうえで旧平価金解禁、金本位制への復帰を断行しましたが、次に御覧に入れるのはこの時の十円の日本銀行兌換券です。中央よりちょっと右に、「此券引換に金貨拾圓相渡可申候」と書いてあります。この兌換券の発行、金解禁が大恐慌を呼ぶことになったのです。

日本経済は、翌年 1930 年になってはじめてアメリカ発の世界大恐慌の影響を受けます。同年春の生糸価格と繭価格の暴落がそれであって、同年秋の豊作の予想発表による米価の暴落とあいまって、米と繭を二大商品とする日本農業は深刻な恐慌状態に入り、農村では欠食児童や娘の身売り、青田売り、都会では失業者が街にあふれ、不安と不満が積りつもってついには血盟団事件・五一五事件など、青年将校をも巻き込んだテロリズムやクーデターが実行され、大きな社会的不安を生みました。

井上準之助を暗殺した小沼正の獄中手記は、茨城県のみじめな一人の青年が、東京に出て都会の贅沢と腐敗にあきれ、暗に賄賂を請求する警察の墮落に憤慨し、倒産で失業した労働者の絶望的な運動に対しても反感を抱き、家族の崩壊と蹂躪に怒ってついにはピストルの引き金を引くに至る過程を典型的に示しています。

アメリカの大恐慌は 1929 年 10 月の暗黒の木曜日以降、まず南北アメリカや東欧・北欧に波及し、1930 年再びアメリカに戻った第 2 波が先に申したように日本に影響を及ぼしたのみでなく、1931 年にはドイツやイギリスなどヨーロッパの中枢部を襲い、1933 年のアメリカ銀行大恐慌に対してとられた金本位制離脱とニューディール政策採用ののちも事態は好転せずに 1937 年恐慌を迎え、結局景気が本格的に回復するのは 1939 年第二次欧州大戦の勃発以降のことになりました。

その大戦を引き起こしたのはドイツ、第一次大戦後の膨大な賠償金支払いの負担と大恐慌による失業者の激増により極度に高まった社会的不満を結集させたナチスのヒットラーが掌握した政権による再軍備実行によるものであり、共産党を弾圧したのちユダヤ人の大虐殺、ホロコーストに進んでいくのです。

「恐慌」とならんで、この講義では「戦争」も重視してきました。日清戦争だけでなく、義和団運動の弾圧（北清事変）、日露戦争、第一次大戦時の対ドイツ戦争、ロシア革命への軍事力による干渉のためのシベリア出兵、中国国民革命への干渉である 3 次にわたる山東出兵など、戦前の日本は十年に一度どころかほぼ五年に一度戦争を起こしてきましたが、特に重要なのは「満州事変」とよばれた 1931 年 9 月以降の中国東北侵略、「支那事変」とよばれた 1937 年 7 月以降の日中全面戦争、「大東亜戦争」とよばれた 1941 年 12 月以降のアジア・太平洋戦争という、一連の三つの戦争です。

いわゆる「満州事変」で日本は中国の東北部を侵略し、「満州国」という傀儡国家を作って軍事的・政治的・経済的に支配しましたが、期待された軍需資源が十分に開発できないことがわかると、万里の長城のすぐ南にある華北の資源の支配を目標とすることになり、これが「支那事変」とよばれた日中全面戦争につながることになりました。中国東北侵略の時期には「満州国」政府は経済統制を実行することを試みましたが、日本本国ではなお統制を実行するに至らず、経済史的に見れば日本はなお戦時経済とは呼べなかったのですが、日中全面戦争期に入りますと日本本国でも本格的な経済統制が実行され、日本の経済はこの時から戦時経済の時期に入りました。

実態が「戦争」であるにもかかわらず「事変」と呼んだのは、宣戦布告をするとアメリカが中立法を発動して交戦国である日本に重要資源の輸出を止めてしまうことを恐れたからです。アメリカをはじめその他諸外国から軍需物資を輸入することがその当時の日本にとって決定的に重要でした。輸入のための外貨が不足しているという外貨不足問題が日中全面戦争期の日本経済を根本的に制約していました。戦時中の経済運営の中心になっていた物資動員計画も、外貨使用可能量、「輸入力」とよばれましたが、それを軸にして決定されたのです。

1941年7月、日本軍が行った南部仏印進駐に対する対抗措置としてアメリカ・イギリス・オランダが対日資産凍結を行うと、もはや外貨による物資輸入は不可能になり、今度は日本が支配している地域から日本本国へ物資を輸送するための船、船舶「輸送力」の不足が日本の戦時経済を制約することになります。物資動員計画の最終的制約要件も船舶輸送力になりました。開戦にあたってなされた国力判断でも、船舶輸送力や石油輸送力が重視されていましたし、戦時末期の国力判断でも、戦時経済が急激に悪化していく状態は、非常に早くからはっきり報告されていたのです。

たとえば、1944年8月の御前会議の記録によれば、潜水艦による輸送力の激減のため、同年年末には国力の回復能力はおおむね喪失すると判断されており、45年3月10日の東京大空襲、5月の横浜大空襲を受けたのちの45年6月8日の御前会議でも、6月以降の計画的交通は期待しえず、鉄鋼・石炭の不足で中枢地帯の工業は運転休止、兵器よりも食料と塩の輸送を最優先しなければ局地的に飢餓状態に陥る、等々の判断がなされておりまして、1945年7月26日のポツダム宣言を「黙殺」し、徒に8月6日・9日の原爆投下までの時日を無為に過ごし、その後も「国体護持」のための交渉を試みようとした、という経過は、現在のわれわれにとっては到底考えることではありません。写真28は広島「グラウンド・ゼロ」、この言葉は最近2001年9月の米国中枢部同時テロによるニューヨーク世界貿易センター跡を指す言葉として使われていますが、本来は広島原爆の時に使われたものです。

長崎については写真29の一枚にとどめましょう、一人の少年が幼子を背負い、直立不動、唇を噛み締め、キッと前を凝視したまま立ち尽くしています。場所は臨時の焼場、少年の背中で熟睡しているかに見える幼子は実は既に死んでいて、火葬にあっていた男たちは

少年に近寄っておんぶ紐を解いてやり、幼子を火に横たえ、少年は下唇に赤く血をにじませて、炎が鎮まるとくるりと踵を返して沈黙のまま立ち去った、ということです。写真を撮ったのは米軍カメラマンのジョー・オダネル、少年に声をかけることは到底できなかった、といいます。少年のその後は知る由もありませんが、オダネルはたくさん撮った写真を見ることに耐えかねてトランクにしまいこみ、近年ようやく決意して開封し、1990年から写真展を開きました。スミソニアン博物館では在郷軍人の圧力でついに展示されなかった原爆写真展のなかの一枚の写真です。

六

1945年9月2日、東京湾ミズーリ号艦上での降伏文書調印の時に掲げられたのが写真30の星条旗です。実はこれは1853年にペリー提督の黒船艦隊が久里浜の応接所に掲げた旗そのものでして、星の数、州の数が31しかありません。敗戦により連合軍に占領された惨憺たる廃墟の中で、財閥解体や農地改革、労働運動の解放、そして日本国憲法や財政法などによる一連の非軍事化・民主化措置、私の云う「戦後変革」が行われました。冷戦の開始に伴う占領政策の転換はありましたが、この戦後変革期につくられた軍事的・外交的・政治的枠組みは、敗戦から3分の2世紀近くを経た現在もなお生きています。主権在民・戦争放棄・人権尊重を定めた日本国憲法前文と第9条並びに第3章は、度重なる改憲論議をこえて現在なお健在です。

他方で、南北分断を固定化することになったあの不幸な朝鮮戦争を、日本は経済復興の機会として捉えることになりました。サンフランシスコ対日講和条約と日米安全保障条約締結以降、日本がアメリカに対し軍事的・外交的・政治的に隷属していることは世界のよく知るところです。

しかし経済的には、日本は高度成長によって世界を驚嘆させました。高度成長によって、所得は上昇し、貧困や病気による生活難は減少し、健康水準も高まって体格が良くなり、進学率は高まって教育水準も上がりました。

高度成長期が日本の歴史にとってもつ意義は、農業生産が開始され人口が急増した弥生時代に劣らない、と私が14年前の論文で言い切ったとき、人々はびっくりされましたが、これについてもちょっと説明しておきましょう。食料を収集するのみで人間がなお自然の中に一体化されていた旧石器時代や縄文時代と比べると、水田稲作農耕を始めて人間が自然に手を加え始めた弥生時代には、食料生産のために農業共同体が形成されました。

この農業共同体は、その後も中世・近世を通じて強力に維持され、明治維新期の地租改正によっても、第二次大戦後の戦後変革期の農地改革によっても、政治的な権力的措置によってはなかなか解体されなかったのですが、その農業共同体が、経済過程内部の力によって最終的に解体されたのがこの高度成長期であるというのが私の判断でした。つまり、共同体が解体されたのちは、人びとは商品生産と市場による結びつきの中で労働するほか生きてゆくことができなくなってしまったのだ、ということをお私に言いたかったのです。

ここでちょっと川越・東京・横浜3市の動向をまた見ておくことにしましょう。開港百年にあたる1959年はちょうど私が大学に入学したときですが、政治的には安倍晋三元首相の祖父に当たる岸信介首相が日米安全保障条約の改定を強行しようとして、労働者や農民、市民や学生の猛反発、いわゆる60年安保反対闘争を受けて退陣を余儀なくされた時期であり、東京の中心部は毎日デモの波でいっぱいでした。経済面では高度成長最初の神武景気に次ぐ岩戸景気のさなかにありました。

このときの東京都区部の人口は831万人で、現在の市域による横浜市の1960年の数値は約138万人です。東京都区部は横浜市のちょうど6倍の人口だったわけです。なお、横浜は1956年に政令指定都市となっております。

川越市は1955年、高度成長がちょうど始まる時期に霞が関村など周辺9か村を合併して市域を拡大し、人口は合併前の5万5836人からほぼ倍増して10万4612人、約10万人になりました。ちなみに1950年の霞が関村の人口は6055人です。1956年には首都圏整備法が、58年には首都圏市街地開発区域整備法が制定されており、川越は少し後の1962年に市街地開発区域に指定されています。1959年には川越乗用自動車組合が解雇撤回を求めて無期限ストに入り、翌年まで417日の長期ストを行っていました。

少し飛んで、開港百五十年にあたる今年に一番近い国勢調査である2005年のデータをここで見ておきますと、東京都区部の人口は849万人、横浜市の人口は358万人、川越市の人口は33万3千人となっています。ですから、川越市は合併からちょうど50年間に約3.2倍に増えたわけです。産業別就業者の構成を見ると、製造業が18.6%、卸売・小売業が18.1%、医療・福祉に7.5%、教育・学習支援に4.8%の人が携わっています。総人口規模は東京都区部の4%、横浜市の9%にあたります。

折角ですから20世紀末の横浜港と東京港の模様も見ておきましょう。図面31は1995年の横浜港の立地図で、南から金沢工業団地、根岸湾臨海工業地帯、本牧埠頭関連産業用地などが海にせり出し、鶴見・川崎まで連なっています。図面32は同年の東京港の現況図で、第一航路から大井・青海のコンテナ埠頭を通過して品川・芝浦埠頭に、第三航路が貯木場や鉄鋼埠頭につらなるありさまが判ります。

陸に上がりますと、江戸から戦前の東京へ、そして戦後の東京へ、市街地が拡大し続けたことは図33で明らかです。江戸時代は紫や青の地域だけでしたが、1888年・1914年・1945年と赤や橙色の地域まで広がり、高度成長期を経た1986年には黄色の地帯まで一気に拡大しました。川越はちょうど西北に飛び石を飛んだようなところに位置しています。

幕末の辺鄙な一漁村から出発して、横浜は外国貿易の中心地となり、商業都市に工業都市の性格を加え、さらに近年では住宅地としての性格も併せ持つにいたったということができましょう。商業都市としての性格が強かった小江戸川越も、1959年から61年にかけて農地の転用率が非常に高くなり、1960年代になって南西部の川越・狭山工業団地（写真34）や北東部の川越工業団地（写真35）、北西部の富士見工業団地の形成により内陸型の工業化が進み、同時に宅地開発の進展、本学第一キャンパスの先にある角栄団地、第二キ

キャンパスへの道沿いにある東急団地などが身近なものですが、川越市も東京の衛星都市としての性格を強める方向に変貌していくことになりました。1965年に国際商科大学が設立され、現在の東京国際大学の礎が築かれたわけです。

開港150年たった現在2009年の横浜・東京・川越についても経済史的視角から現状を叙述すべきでありましょうし、東京都産業労働局の『グラフィック東京の産業と雇用就業』などネットで読める良い情報源もありますが、時間もありませんので川越だけに絞ります。川越は商業・工業・農業とも埼玉県の中で3～4位の販売及び生産額をあげており、産業的にはバランス良く発展しているといつてよいでしょう。商業では大型店の出店問題はありますが県西部の商取引の中心で、工業は狭山市に次いで第二位、一般機械・化学工業製品・情報通信機械・輸送機械・食料品・印刷の上位6品目で82%を占めています。また、蔵造りの街並みや時の鐘、喜多院などに年間およそ500万人の観光客を集める観光都市でもあることは御承知のとおりです。

1955年から始まり、1971年のドルショックをへて1973年の第一次石油危機に到って高度成長期はひとまず収束しますが、その後のいわゆる「安定成長期」にも国際的に見れば日本の経済成長率はなお高く、特に1979年の第二次石油危機ののちには欧米諸国の経済的困難をよそに「経済大国」を誇る時期もありました。1985年のプラザ合意後の円高不況から円高好況・バブル経済への突入、バブルの崩壊といわゆる「失われた十年」、1989年から1991年にかけての東欧ソ連社会主義の崩壊とポスト冷戦期への移行、2002年以降のあまり好況感がわからない緩やかな上昇などについても、『近現代日本経済史要覧』にある史料や統計表、年表などによって見てきました。それと同時に、さまざまな写真を眺めながら、この『要覧』を全部読み終わったわけです。

これは2007年9月に刊行したものですから、当然2006年以降については記載が不十分です。学部の講義ではこれを年末の新聞記事にみられる日誌や、株価の動向を示すグラフで補足しましたが、講義を始める時に述べた2008年9月15日のリーマン・ショックが、アメリカ発の世界金融恐慌のメルクマールとして長く記憶にとどめられるだろう、という私の判断は、今のところまだ訂正する必要はないようです。あるいはこれは1989年にはじまるポスト冷戦期の終焉を示す大きな歴史的意義をもつものであるかもしれません。また、より中期的・長期的に見て、さらに大きな世界経済あるいはグローバル情報化社会の構造変化に繋がるものであるかもしれません。

いわゆる「新自由主義」・市場原理主義の破綻は明白となり、発展途上国のみならず日本自体についても、貧困や格差社会がふたたび注目されつつあります。資本主義に必ず伴う恐慌と失業と社会的不満、これがかつてのようにテロや戦争につながることはないように、私たちは改めて歴史の真実を追求しなければならないと思います。

しかし現在の経済についてこれ以上立ち入って議論することは、歴史学の一部としての日本経済史の講義では慎んだほうが良いと思います。むしろ昭和恐慌や世界大恐慌、そこから発した中国侵略や第二次世界大戦について、経済史的にきちんと勉強することによつ

て、目の前で展開を続ける現在の日本経済・世界経済を考える時の視点の一つに加えてほしい、というのが私の願いです。以上が今学期の日本経済史の講義の概要です。

七

次に、私が東京国際大学にきてからの10年間にどんな講義をしてきたかを振り返ってみたいと思います。1999年度から、私は学部で各学年の「演習」と、この「日本経済史」、それから商学部との乗り入れ科目の「歴史学」や「経済の歴史」を担当しました。大学院では「経済史研究」と「第一学群演習」、「日本経済史特別研究」「史料批判研究共同演習」と「比較社会・経済・文化特別演習」の合同演習、「論文作成指導」などを担当しました。

学部の「演習」では、参加する学生諸君が最も関心の深いテーマを選んで楽しく勉強を進めるように、テーマ設定は自由とする方式をとりました。「日本経済史」の講義は、だいたい私が執筆した教科書を用いて行いましたが、昨年度と今年度は私たちの研究グループで作成した資料集である『近現代日本経済史要覧』を用いました。ただし、これらのテキストの使い方については、毎年工夫を重ね重点の置き方を変えて、各年度ごとに講義内容を改善することに努めてきたつもりです。

前任校の東京大学で私が長年担当していたのは「現代日本経済史」という科目で、ほぼ1914年の第一次世界大戦以降の経済史を講義しておりましたから、本学に移った当座の数年間は、古代史・中世史・近世史の勉強を少しいたしまして、その結果最初の数年間の「日本経済史」の講義は、古代や中世・近世の比重が相当大きくなっていったと思います。国内研修中に慶応義塾大学の柳沢遊教授に講義をお願いした年以外の9年間、「日本経済史」の講義は私が担当いたしました。

講義の対象として重点を置いた時期は、基本的には近現代ですが、初期の講義では古代からの約2000年のすべてを、中ごろの講義では現代の比重を大きくして日清戦争以降現在までの約100年余りに重点を置き、最近は幕末開国以来の近現代150年を扱うというように推移しました。

講義の準備に一番時間をかけたのは「歴史学」の講義です。東京国際大学にきて初めの2年間は、この「歴史学」の講義原稿の作成にほとんどの時間を費やしたように思います。正面から「歴史学」の講義をするのはこれが初めてでしたから、最初はまったく手探りで方法論や史料集の勉強を始めました。結局「日本経済史」の講義内容と混線しないように、大冒険で世界史の、それも古代に重点を置いた構成の講義案を作り、詳しい年表を作って配りました。メソポタミア、エジプト、ギリシア、ローマ、ビザンチン、中央アジア、インド、中国、そしてヨーロッパ、なるべく学生諸君の関心を引き起こすような資料を集めて文明史風の講義を組み立てたのですが、もとより素人が読みかじってまとめただけの途方もないものですから、聴講してくれた学生さんには大変気の毒だったと思います。

しかし、私にとってはこの講義の準備だけに東京国際大学の最初の二年間を捧げたこともまた事実なのです。ところが、着任して二年もたたないうちに学部長に選出されるといふ全く予想もしていなかった事態が生じ、この「歴史学」の講義は非常勤講師の先生にお願いすることにきまって、「歴史学」のノートはお蔵入りになってしまいました。

学部長を務めた二年間も「日本経済史」の講義や「演習」は続けましたが、ほとんど全部の時間は学部運営と学内行政に費やすほかはなく、さらに学部長退任後の三年間は日本学術会議の会員に選出されたため、予想外に多忙な学術会議の仕事に振り回されてしまいました。学術会議では松田芳郎さんと同じ第 3 部に所属し、安全で安心な世界と日本の構築委員会で「安全と安心の基礎としての平和」という報告を書き、また学術の在り方委員会で「21 世紀の学術と学術会議」という報告をしたほか、『学術の動向』という学術会議の機関誌からもとめられて「世紀転換期における経済史的一考察：長期的な『観察』と『俯瞰』」という文章を書きました。

結局落ち着いて「日本経済史」と「歴史学」の講義に向き合うことができるようになったのは今から足掛け三年前ということになりましたが、今度はカリキュラム改正により「歴史学」の講義が通年ではなく半年に短縮され、「日本経済史」の講義は半年週二回、ほかに新設の入門科目「経済の歴史」を担当することになりました。

通年講義だった「歴史学」を半年に縮めるのは非常に難しく、結局主題を「世界宗教史」に絞り込み、昨年度は古代ユダヤ教・初期キリスト教・カトリック・ビザンチン・イスラームを対象とし、今年度はバラモン教・初期仏教・ヒンドゥー教・上座部仏教・北伝仏教・儒教・道教・中国仏教・朝鮮朱子学・日本仏教と東に進んで、最後に現代世界の理解に欠かせない三つの一神教、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の相互関係について語りました。

経済史を専攻する者がなぜ宗教史を講ずるといふ無謀なことを試みようとしたのかと申しますと、それは戦時経済の歴史にずっと関心をもち、こだわりつづけていたからです。戦争を終らせるためには相手の「精神的戦闘力の粉碎」しか道がなく、その「精神的戦闘力」の最大の源は「宗教的使命感」だと思ったからであります。世界の各宗教について相互によく理解し合い、相互に宗教的寛容をしめすことによって、はじめて戦争を防止する基礎が築けるだろうと思ひまして、大変未熟ながら宗教史を講義しましたが、この講義は学生さんが思いのほか興味を示してくれまして、静かに熱心に聴いてくれました。

私自身が何のために戦時経済を学んだのか、人間同士が殺戮し合う戦争という途方もない事態を、少なくとも日本においては、少なくとも東アジアにおいては、二度と繰り返してはならない、そのためには、語のもっとも広い意味での「平和」を育てなければいけない、戦争を支えるものは現代戦においては究極において経済力であり、かつて強調されたような悪しき意味での「精神力」ではなかったことは先の大戦で証明されています。では逆に平和を育てるものは何か、何よりも平和を育てる意思であり、逆の意味での「精神力」、語の厳格な意味での精神力、人間の精神力であると考えます。社会科学的に言えば、平和

の経済的基礎を作ること、戦争を実行しえない経済構造と法制を確固たるものにする、その前提としてかかる精神力を備えた人間を育てること、真の意味での教育を行うことが不可欠でありましょう。

もう少し抽象的にいえば、平和への意思を歴史認識の力にし、そうして強められた歴史認識の力を平和への着実な決断につなげていくことが大事だ、とも言えましょう。予見しうる将来をいち早く賢明に察知するために、「現在」をとらえる努力を続ける、歴史を単に「過去」のものとしてだけでなく、現在の私たちの位置を知るための一つの方法と考える、歴史を正確に知る努力を通じて、より良い将来を作るために知恵を出し、将来の歴史に働きかける、さらに付け加えていえば、ゆとりをもって歴史を楽しみ、遊びつつ学び、学びつつ遊ぶ境地に入り、「現在」をさらに充実したものにする、こんなことになるでしょうか。

講義以外の面では、本学のおかげでいくつかの有難い機会を与えて頂きました。まず学内の特別研究助成を「国民経済計算体系による日中長期推計の基礎的研究」という課題で受けることができ、日中統計研究会を組織して学内外の共同研究者と楽しく研究することができました。私は「戦時・戦後の資金計画」という題で、戦時中から山田雄三推計にいたる「国民所得」推計の発展過程をほぼ明らかにできたかと思えます。

また、半年間の国内研修の機会を特別に与えて頂きまして、慶應義塾大学訪問教授として勉強することができました。

さらに一回だけですが一般社会人への公開講座で、自分の問題意識と自分の価値体系を明言したうえで「歴史から見た日本の現在」についての講義をまとめる機会が与えられました。その時は「貧困と富裕」（貧しさからの脱却とクオリティ・オブ・ライフの改善）、「病気と医療」（健康と病苦をやわらげるための医療）、「戦争と平和」（安全と安心の基礎としての平和）、「文化と教育」（文化、その基礎としての教育）、「自然と人間」（自然の尊重、自然との共存）という5つの基準をたてて、日本と世界の現状を批判的に分析いたしました。

また、一昨年の入学式では全学教職員代表として、入学する学生・院生に祝辞を述べるように要請され、大変緊張しましたが大学における「精神的独立」の重要性という一点に絞ってお話をいたしました。

また、学外の日本学術振興会から相当巨額の科学研究費を連年にわたって受けることができ、私が組織している現代日本経済史研究会の仲間とともに共同研究を推進することが可能になりました。このところ5年間にわたり毎年韓国の各都市で東アジア経済史シンポジウムを開催できたのもそのおかげです。

この間、図書館や研究助成課の方々に大変お世話になりましたので、本年度は科学研究費の間接経費のうち相当部分を図書館施設充実にあて、内外の日本研究全般を中心にした洋書・和書のコレクションを寄付することができました。教育研究にあたりさまざまな事務部局の方たちにお世話になったことは言うまでもありません。

また、私が長い時間をかけて集めていた戦時経済総動員関係の一次資料を、山崎志郎さんとの共同編集により全 65 巻にまとめて復刻出版する事業も完成し、30 年以上も懸案になっていた『近現代日本経済史要覧』の改訂補充も先程申し上げた共同編集チームの力で実現しました。先ほどからたびたび触れている今学期の教材として用いたのがこの『要覧』です。

八

では最後に、大学に入学してから現在までの五十年間を振りかえってみることといたしましょう。私が社会科学、特に経済学を志したのは高校二年の時でした。経済学を志したのも、貧乏はどうしたらなくせるか、という実に簡単な動機からであります。なぜそう思ったか、というのもまた簡単で、私の家が貧しかったからです。

加えて申せば、妹が小さい時から悪性の多発性関節リウマチを患い、発病から 55 年以上たった現在も激しい痛みをこらえて闘病中、という事情もありました。医学を学ぼうか、と思ったこともありましたが、医療も受けられない貧乏な人々、貧困と病気の悪循環から逃れられない人々の役に立つのはやはり経済学であろうと思ひこんで、経済の生理学と資本主義の病理学を勉強したほうが意味があるのではないかと思ひ、進学先には資本主義に批判的な学者が多いと聞いた東京大学経済学部を選びました。

はじめは理論的な勉強が第一だと思っていましたが、次第に経済の現状分析へと進み、さらに財政学や社会政策学など経済政策の勉強に進みました。理論や政策の勉強をしているうちに歴史の勉強が必要なことに気が付き、経済史学へ、さらに経済政策史へと勉強の範囲を広げ、そして結局現代の日本の経済の歴史、現代日本経済史へ辿り付いたわけです。

この間、60 年安保のデモやアルバイトに忙しかったのはお手許の文章にも記しました通りですが、大学二年の夏学期には厚生省・労働省や東京都民生局の資料を調べて「貧困世帯の家計調査」について統計学の中村隆英先生の演習で報告し、三年のときには大蔵省文庫に通って民間企業の経理面での戦前と戦後を区切る措置であった「企業再建整備と金融機関再建整備」についてのレポートを現代日本経済史演習担当の安藤良雄先生に提出しました。卒業論文は銀行局年報の都道府県別統計を考察した「昭和初年の銀行集中」で、大学院に進んでからの修士論文は戦時経済統制の一次史料の発見に基づく「戦時資金統制と産業金融」という論文です。

この論文が認められて助手となり、主として貨幣面を中心にしていた修士論文を助手終了論文では実物面にも展開し、戦時期の国際収支問題を軸に「日中戦争期の外貨決済」という論文をまとめて助教授に就任しました。最初に行った講義は「日本の戦時経済」で、外国書講読のほかは恩師の安藤先生と交代で「現代日本経済史」を講義し、学部や大学院の演習も早くから担当しました。

私は幸いなことに中村隆英先生と安藤良雄先生という二人の恩師に恵まれましたが、実は、私の講義を聴講し、私の演習に出席する学部や大学院の学生さんを、すべて私の第三

の恩師だと思ってまいりました。講義を準備する私を教育してくれたのは、あやふやなことをいえばぐっと睨む聴講者の眼の光であり、演習で質問を繰り出す学生さんだったと思います。私はたしかに教師ではありましたが、この意味では学生であり、いわば「生涯一学生」、これから先もさまざまな史料や文献を師として学ぶ一学生としての気持は続くと思います。

安藤先生のもとで助手になりました時、中村隆英先生は学者になるものの心得として、一年に二本はまともな論文を書くことだ、と諭されました。一年に二本の論文を書くことは不可能ではないかもしれませんが、しかし、「まともな」という言葉を上に乗せた論文となりますと、一年に二本はおろか、五年に一本書くことも難しかったと思います。

助手のころから土地制度史学会という学会の幹事として学会事務局の仕事が忙しくなり、その学会以外でも満州史研究会、植民地研究会や占領史研究会などの研究会の発足にかかわり、さらに現代史を創ってきた人々への聞き取り、最近ではオーラル・ヒストリーといってもはやされていますが、聞き取りの準備のための時間が相当必要となりました。講義をするかわりに研究論文を発表しつづけることはなかなか難しく、自分で納得できる論文が書けたのはせいぜい1966年から76年まで、27歳から37歳までのわずか10年間だけだったと思います。その後は大蔵省の占領期の『昭和財政史』編纂の幹事や、論文集の編集などの共同作業に追われて、自分で考えて「まとも」だと思える論文はその後執筆できないまま今日に至りました。

大学の教員の為すべき仕事としては、学習、研究、教育、学内行政、学会活動の五つがあると思いますが、30代後半からは、学部・大学院双方の学生委員会・学寮委員会の委員長や学部図書館長・全学図書行政商議会議長などの学内行政、土地制度史学会の編集理事・研究理事・さらには理事代表などの学会活動に追われ、教育だけはなんとか義務を果たしてきたと思いますが、学習と研究の面では全く不十分な成果しかあげられませんでした。大学の教員にとっても、学習は、研究と教育をきちんと行うために欠かすことができないものですが、その時間を私はきちんと作ることに失敗したのだと思います。

大学人が研究と教育を対立させて考えることは私は間違いだと思いますが、そして前にも述べましたように、教育すべき相手の学生さんこそが、私を教育準備にとどまらない本来の研究にも駆り立ててくれる第三の師であると思っていたわけですから、もっともっと学習に励むべきだった、と思います。七十を迎えてなおこのようなことを申し上げるのはまことに恥ずかしいことです。ただ、大学人の一員としては、単純に学習時間をもっと多くすべきだったと後悔しているわけではありません。学内行政と学会活動は、大学人としてはやはりきちんと義務を果たすべき重要な仕事であると思います。

学会活動では厳格なレフェリー制を堅持して学会誌をきちんと定期的に発行していくこと、その時代時代に要請される社会的問題群の基礎を分析する研究会を定期的に開催すること、これらを実現するために事務局の体制を研究者自身が担って組織的に維持すること、以上の三点を確保するために尽力するという姿勢だけは堅持できたかと思います。

学内行政のために費やさなければならない時間が多いことは、どなたにとってもやはり苦痛であろうかと思えます。しかし、大学が大学としての名称を維持しようとするならば、大学人自身が自覚的に自らの大学を大学たらしめる努力を惜しむことは間違いだと思えます。大学の教務や入試など、大学の存立にかかわる重要な基本事項について、大学人が自ら意思を自由に表明し、かつ意思決定の権利を確保していくことは、死活的に重要なことだと思えます。会議の時間と出席人数を掛け合わせれば、天文学的とはいわぬまでも相当大きな時間になります。この時間とエネルギーを相互に尊重し、大学を構成する大学人が自己決定の権利を確保することができるかどうか、それが現在すでに危機的な状況にある日本の私立大学の試金石になるのではないのでしょうか。

一人一人の学生にとって、今日大学は教育の最後の場となっています。私は自分で満足しうる研究の業績をあげることはついにできませんでしたが、学問を愛し、大学を愛しつづけてきた一人の人間として、大学をめぐる昨今の状況は残念ながら大変悲しいものに変わりつつあると感じます。ちょっと古風かもしれませんが、普遍的に変わることのない大学人としての義務、その義務の中に学習・研究・教育のみではなく学内行政や学会活動が位置づけられるべきである、と私は今でも確信しております。この確信は、さしあたり私自身の個人の人權領域の内部に属するものでございまして、皆さまも皆さま個々人の神聖不可侵な人權領域において、その確信されるところに従って、大学人としての今後のご活躍をお願いしたいと念じております。

そろそろ時間がなくなってきました。最後にここでもう一つ申しあげておかなければならないことがございます。私が十分に研究に専念することができなくなった一つの理由として、1975年のことですが、私の作品の一つが他の研究者によって剽窃された際、その研究者が学界において果たしていた役割に配慮して、盗用を公然と指摘することをためらったことがあげられます。まだ公刊されていない自分の論文の構成を、ほとんどそのまま他人の著作の編別構成に利用されてしまったのですが、その結果、私は自分の最初の著作を著書として公表することも学位を申請することも断念することになり、以後私は学界における倫理の欠如と売名行為の横行に暗澹たる気分を抱いたまま、一切単著を出版せず、ただ共同研究の編集や資料集の出版のみに終始する態度を維持して現在に至ったのです。学生時代のアルバイトで勤めた研究所で、共同研究を重んずる姿勢、業績主義とは正反対のいわば「匿名の思想」とでも言うべきものを叩き込まれていたことが、共同研究に徹底する態度の維持に強く影響していたのだと思えます。

この事件は研究者としての私にとって致命傷となってしまったわけですが、私のその作品が26年後にあるリーディングスに収録された際、お手許のプリントの最後の2ページにその経過について実名を挙げてしるしてあります。現在は早稲田大学教授の小林英夫という人ですが、私がこの追記を公表してから8年、私はご本人からは何の抗議も受けておらず、口頭で謝罪の意を軽く告げられただけであり、現在もその人は次々に著作を公表し、大活躍中です。盗用、剽窃をすることが学問の正常な発展にとっていかに大きな打撃をあ

たえるか、その被害を蒙った当事者として、研究者への道を歩む皆さんにはお伝えしておく義務があるかと思ひ、恥ずかしさを忍んで今日皆様に申し上げる次第です。「宋襄の仁」という言葉が他人ごとではないことを改めて噛みしめることになりました。

ただ、この事件は私が気を取り直して学問に立ち向かうための試練の機会をも与えてくれました。歴史学研究者の陥りやすい誤りとして、過去を重んずるあまり現代を知らない、より正確には、自ら選んだ主題と現在との関係を重んずるあまり、自分の選んだ分野以外の現代を知らない、その結果として自分の置かれている現在の客観的位置を知らず、過去への発問の仕方を誤って、歴史としての過去の位置づけをも誤るといふ、大きな難問があります。この難問の解決は、結局のところ歴史研究者各自の他分野への関心の自覚的な強化と、歴史研究者相互の批判によるほかはありません。限りなく現代に迫るには、批判の学としての歴史学は史料批判のみでなく、発想自身への批判が必要であり、それは究極のところ共同研究によるほかはない、共同研究に徹底する形で、学問への惜しむことなき献身をしようとした際の私の覚悟はこのようなものでした。

パソコンでインターネットが使えるようになって以来、学生諸君もレポートや答案を作成するときにカット・アンド・ペーストをよくするようです。これは実際には複数の著作から盗作することを意味します。カット・アンド・ペーストをしないように、引用箇所を明確にするように、ウィキペディアを安易に信じないように、と私がくりかえし言うのはこういう背景があったからです。そのような行為は、他の人の一生かけての仕事をも、大きく左右することがあるわけですから。

ちょっと話が暗くなりました。暗くなるなら闇は闇でも夜の闇、夜空にきらめく星の話に変えましょう。天空に輝くシリウスと地球との距離は 8.6 光年、今夜私たちが見るシリウスは、8.6 年前にシリウスが発した光です。私が本学に着任して 1 年ちょっと、ちょうど「歴史学」の講義案を夢中になって作っていたころです。

大星とよばれる青白いシリウスと、こいぬ座の色白のプロキオン、オリオン座の右肩にある赤いベテルギウスのつくる三角形を「冬の大三角」といいますが、プロキオンは 11 年まえの光で、私がちょうど本学の専任教授になる前、一年間だけ本学大学院に非常勤講師として通っていた頃です。

牽牛星、彦星のアルタイルは 17 年前で旧ユーゴスラヴィアが解体した年、織姫星のヴェガは 25 年前で日本が世界一の長寿国となった年、おうし座の橙色のアルデバランは 67 年前で私が 3 歳のころ、ベテルギウスは 497 年前の光でメディチ家がフィレンツェに復帰した年、オリオン座の左足にあつて白く輝くりゲルは 863 年昔の高麗で『三国史記』が完成した年、白鳥座のデネブは実に 1424 年前の光で隋が中国を統一する 4 年前と、現代の天文学で用いられている「改訂ヒッパルコス星表」によればそのように特定されています。

なぜこのように詳細な年代決定が可能になったか、ちょっと不思議かもしれませんが、第二次世界大戦後の、現代天文学の進歩がこれを可能としたのです。1946 年にガモフがビッグ・バン理論を提唱し、1965 年にそれを裏付ける 3 K 宇宙背景放射が確認され、1992

年にコービーCOBE 衛星チームによって 3 K 宇宙背景放射の揺らぎが確認され、2001 年のハッブル宇宙望遠鏡チームによるハッブル定数の高精度決定、2003 年の WMAP 衛星チームによる宇宙論パラメータの精密決定をへて、宇宙の年齢が 137 億年と判明し、2007 年に「改訂ヒッパルコス星表」がつくられたのです。

今年がガリレオ・ガリレイが天体望遠鏡を用いて観察を行った 1609 年からちょうど 400 年、世界天文年と定められています。その標語は「宇宙—解き明かすのはあなた」、「THE UNIVERSE: YOURS TO DISCOVER」、それにならって私の講義も最後はこの言葉、「THE HISTORY: YOURS TO DISCOVER」、「歴史—解き明かすのはあなた」、をもって終わることにいたしましょう。一人一人のみなさんが、歴史をよく知って、世の中を見る力を強めるほかに、歴史を変えていく力を発揮する勇氣 **Courage** は生まれません。自分の判断力をつけること、考える力を身につけて知性 **Intelligence** を磨くこと、一方的な報道などには騙されず自分自身で将来を見通す力 **Vision** を養うために、この日本経済史の講義を役に立てて頂くことが私の最後の希いです。学生諸君の卒業後の生活は、現状では相当の困難が予想されますけれども、厳しい時は凛々しい人を作る、現代の中に歴史を見、歴史の中に現代を見ることによって、厳しい社会生活に挑戦して頂きたいと思います。

振り返りまして、私が初めて教壇に立ったのは大学四年の教育実習のとき、中学校の社会科で「源頼朝と源義経」について講談仕立てで喋ったときですが、大学の教員としての最初の講義は「日本の戦時経済」という特殊講義でありました。それからずっと「現代日本経済史」という講義を担当いたしまして、前任校での最終講義は 1999 年に「世紀転換期の日本経済—経済史の視点から」と題して行いました。その時の副題は「ある銀行の一世紀」、当時破綻した日本債券信用銀行、その前身は日本不動産銀行、さらにその前は朝鮮銀行、韓国銀行、その前は第一銀行釜山支店、と辿りまして、100 年の歴史をとりあげました。今日は期間をさらに伸ばして 150 年、たいへん拙い叙述ですが「開港百五十年史—小江戸・大江戸・そして横浜—」を申し述べました。

天文学は一日一日究められていっています。私たちの歴史学も一日一日深められなければなりません。「歴史—解き明かすのはあなた」、**THE HISTORY: YOURS TO DISCOVER**、この言葉をもって、大学生生活 50 年に、そしてこの大学の教壇に別れを告げることにいたします。以上をもちまして、私の東京国際大学へのお別れの御挨拶、ならびにお礼のご挨拶とさせていただきます。ご静聴くださいましてまことに有難うございました。

そして、さようなら。

図版出所一覧

- 1 川越市庶務課市史編纂室『川越市史写真集』（川越市、1986年）巻頭グラビア
- 2 『小江戸川越：PHOTO SKETCH』（忍田實、1998年）
- 3 『町割から都市計画へ：絵地図で見る川越の都市形成史』（川越市立図書館、1997年）
6頁
- 4 『小江戸川越：PHOTO SKETCH』
- 5 川越市庶務課市史編纂室『川越市史』第四巻近代編（川越市、1978年）315頁
- 6 江戸東京博物館学芸課展示係『図表でみる江戸・東京の世界』（江戸東京博物館、
1998年、2001年改訂版）85頁
- 7 『資料でたどる川越市のあゆみ：市制施行80年』（川越市立博物館、2002年）57
頁
- 8 『川越のあゆみ』川越市制施行70周年記念誌（川越市、1992年）61頁
- 9 『大江戸八百八町』江戸開府400年・開館10周年記念（東京都江戸東京博物館、2003
年）179頁
- 10 『黒船来航と川越藩』（川越市立博物館、1998年）24頁
- 11 同上、13頁
- 12 同上、31頁
- 13 川越の人物誌編集委員会『川越の人物誌』第一集（川越市教育委員会、1983年）89頁
- 14 『川越物語』川越商工会議所100周年誌（川越商工会議所、2000年）47頁
- 15 『小江戸川越：PHOTO SKETCH』
- 16 『川越物語』218 - 219頁
- 17 『小江戸川越：PHOTO SKETCH』
- 18 『たまくす：横浜開港資料館総合案内』27頁
- 19 『ペリー来航と横浜』（横浜開港資料館、2004年）6頁
- 20 「こども歴史講座」テキスト編集委員会、『横浜開港資料館：横浜のあゆみ』1986
年）巻頭折込図
- 21 『たまくす：横浜開港資料館総合案内』30頁
- 22 『川越物語』64頁
- 23 同上、236頁
- 24 同上、248頁
- 25 『資料でたどる川越市のあゆみ：市制施行80年』59頁
- 26 日本貨幣商協同組合『日本貨幣カタログ2008』187頁
- 27 『川越物語』78 - 79頁
- 28 仁科記念財団『原子爆弾：広島・長崎の写真と記録』（光風社書店、1973年）6

- 29 Joe O'Donnell, *Japan 1945: A U. S. Marine's Photographs from Ground Zero*, Vanderbilt University Press , 2005 , p.74 (ジョー・オダネル『トランクの中の日本：米従軍カメラマンの非公式記録』（小学館、1995年）97頁）
- 30 『ペリー来航関係資料図録』（横浜開港資料館、1982年）25頁
- 31 脇村義太郎『東京湾は世界一：湾を守れ！』（私家版、1996年）92頁
- 32 同上、94頁
- 33 東京都都市計画局総務部相談情報課『東京の都市計画百年』（東京都情報連絡室都政情報センター管理部事業課、1989年）73頁
- 34 『川越人：川越市市勢要覧2007』43頁
- 35 同上、6頁